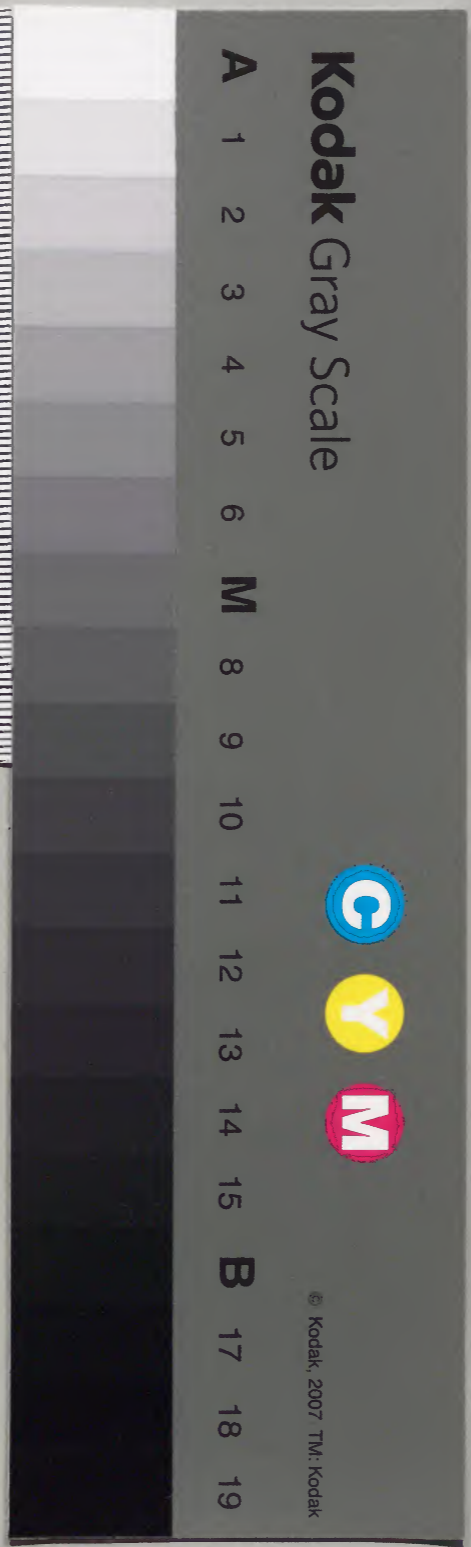


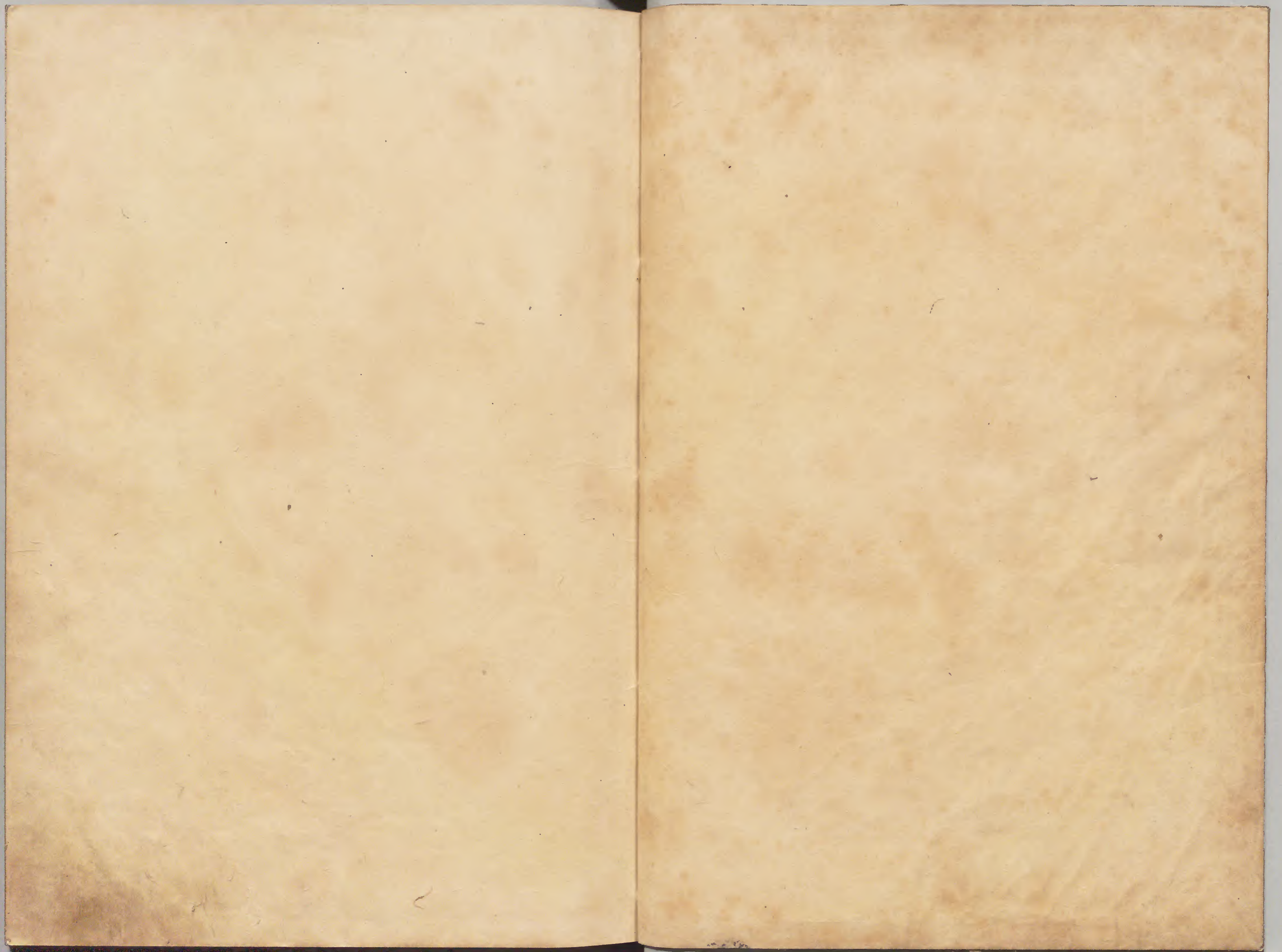
29

# 寛永諸家譜

清和源氏下九冊之内  
頼光流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186( 29 )
函號	獨 76 1





中川

河丹

多田

寛永諸家系圖傳

清和源氏

丁六

頼光流

中川

中平氏

● 重清

伊波守

鎮守府將軍平良文村松五郎六代秩

淺草又傳

父下野守重繩が三男高山二郎重孝  
が後胤なり叔代常列一任と重清  
が代一よりて城列一ゆき抄津國  
多田源氏た清の射清村が末系中川  
た清の射が妻子こなりうのむとあ小  
嫁を

清秀

瀬名湯

生國城列

抄列藤木の城ときづき先一任して  
近江と領む池田勝政よりまきくま  
元龜三年和同伊賀守月國高柳の  
城よりとりて威と近國よりゆきあは  
小よりて勝政と威と何よりそひ度こ  
たよりひよりあは勝政道のをとりよ  
札とそより明日の合戦より和同首と  
そんよのふは領地と何よりまきくま  
あり清秀ひよりたその札とより懐中

あく相立日和回と勝政と相つてふこ死  
清秀和回が首をころ付り三十一歳  
そのち信長一にふ付り苜耒栲  
津守栲列と飲むこ世ふら清秀  
あく一ひ苜耒むあ人の時信長一  
属して戦功あり  
秀吉毛利退治の時清秀ああどく  
中国一ありむきこ戦功あり  
天正十年明智反逆の時清秀秀吉

の先ととつ山崎の山とありて  
合戦一敵の先と大将三牧こたあつ  
伊勢伊勢守と付らりこ世ふらりて  
明智敷少と  
日十一年秀吉こ築田一戦のとき清秀  
秀吉の始り一にいく志津が嶽の城  
とすもり作久る玄蕃こ相戦て四十  
二葉よえら死す法名川巻莊岳

秀政 いせ まさ

坂本清 後五位下 右衛門守

清秀 甚早とうの功 小守り 信長の

じこさなる情列 三木の城とたまり

うまふりり 秀政 秀者より 志すべ

三千騎とひきめく けのり 一あ

先陣とかなり

文禄二年 朝鮮 一七年 二十五あて

討死と 法名 天叟心岳

秀成 いせ なる

小孫清 後五位下 修理大夫

秀者 秀政が討死とき したすひ 以朱下

と 朝鮮を 毒大 名五人へ けっし され

秀政が 職こと しく 秀成 したすり

三木の城と 飲む

文禄四年 朝鮮 一入る 大明の けいもの

こあひたぐりて病をうめりぬれを  
其後豊後の國豊の城となり信小  
よりて取久乃玄蕃がむこり物  
長五年國が原合戦の時長原の國  
小太田飛騨守と教度お戦ひ勝利  
とゆりり飛騨守は石田が黨なり  
日十七年八月十日豊の城よりて死す  
法名圓教宗鑑

女子

池田三た清の耐輝政室  
松平茂菟守利隆母

女子

森美作守忠政室

久盛

内膳正 初名は秀祐後久盛と改





寛永十二年十二月晦日没五位下よこゝかひ

叙す山崎守やまざきのもり伊い佐さおほせおほせ山やま崎ざき守もり七しち

石川いしかわ之の殿の以も忠ちゆう總すうがむがむここうう行ぎやうりり

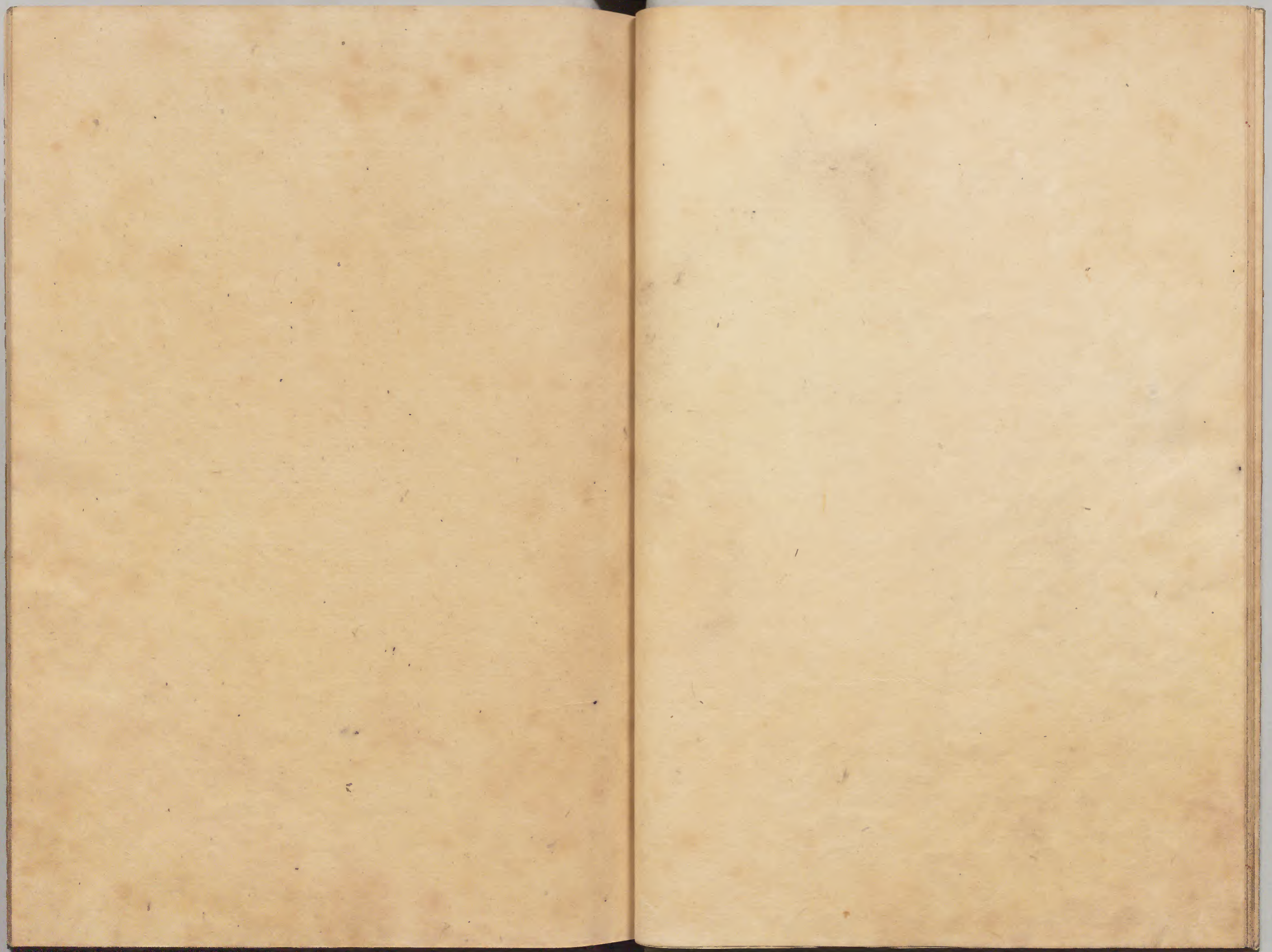
女子にし

水みづ野の出で羽は守の忠ちゆう正せい書しよ

果は

清せい苑えん

家い紋の二に柏はく



中川 なかがわ

● 集 あつ

三九郎

重清 しげきよ

将監 しやうげん 生國尾列 いこくお

大権現 おほごんげん 下つ久 しもくひさ 下久 しもくひさ 下久 しもくひさ

天正十二年長久手合戦の事供奉  
したくまうり山陣の事領地とくま  
たまたまか

同十八年小田原御陣に供奉す

長久手五年関原御陣に供奉す

台徳院殿の侍あり大坂五度の御陣とつ

こし

七十五歳にして病死す

法名寛窓

重良

左平右 生國駿列

長久五年大久保相模守として

台徳院殿とありしたくまうりか

同十九年の冬大坂山陣の時松平越  
中守継小属し山軍役としてあり羽衣年  
の夏山陣より内者若狭守継し属す

そのし  
家級鳩酸草

中川

● 忠吉 たけし

源次郎 げんじ

生國三河 なまくに

廣忠卿 ひろたけ

法名頼周 ほりなま

忠重 ただしげ

市右衛門尉

生國月前

大権現より人奉る

享長十又年六十九歳少く死す

法名法眷

忠直

与物 生國同前

大権現よりつゝ手親

天正十二年尾列長久手合戦の中死

三十七歳にて討死 法名吟松

忠次

市右衛門尉 生國同前

實は忠直が子なり忠直戦死の後

大権現の仰より依く忠直守り長子少く死す

うねち

台徳院殿よりつゝ手奉る

慶長五年高田陣より侍奉

日十九年大坂陣よりつゝ手奉る

將軍家（此）之よりてたびく米地の御加  
増とたまつて都合二千石と銘  
寛永十八年六十五歳とて死す  
法名宗現

忠房

市助

生國茂苑

大坂陣河原御中とて一屋  
て侍り翌年再乱の時首級とあり  
元和七年二十七歳とて死す

法名休齋

忠章

勘三郎

生國同前

元和三年

將軍家より賜へし

曰年永井を前とて一屋とて法  
小姓組の番とつとて

曰九年御上洛の時三浦忠摩とて  
て侍奉



寛永三年上河の付編垣を授け  
て居る

日十年沙小納戸の役とつねに  
食禄又百俵とたまふ

日十一年沙上河の任奉をいへり

忠宗 ひね

市物 生園同前

寛永七年

お軍家より賜へり

日十三年小條お羽守継ふく大御妻

とつねに

日十七年申根大隅守継ふり居す

日十九年二十之歳ふく 法名宗圓

忠明 あき

久吉郎 生園同前

寛永七年

將軍家より賜<sup>たま</sup>ひたまは

同九年小澤出羽守經より大御者として

たす

同十七年中根大隅守經より属す

同十八年父忠次が遺領の四千七百石と

たす

忠政

三十郎 生國同前

寛永十六年

將軍家よりつとまりて食禄とたまは

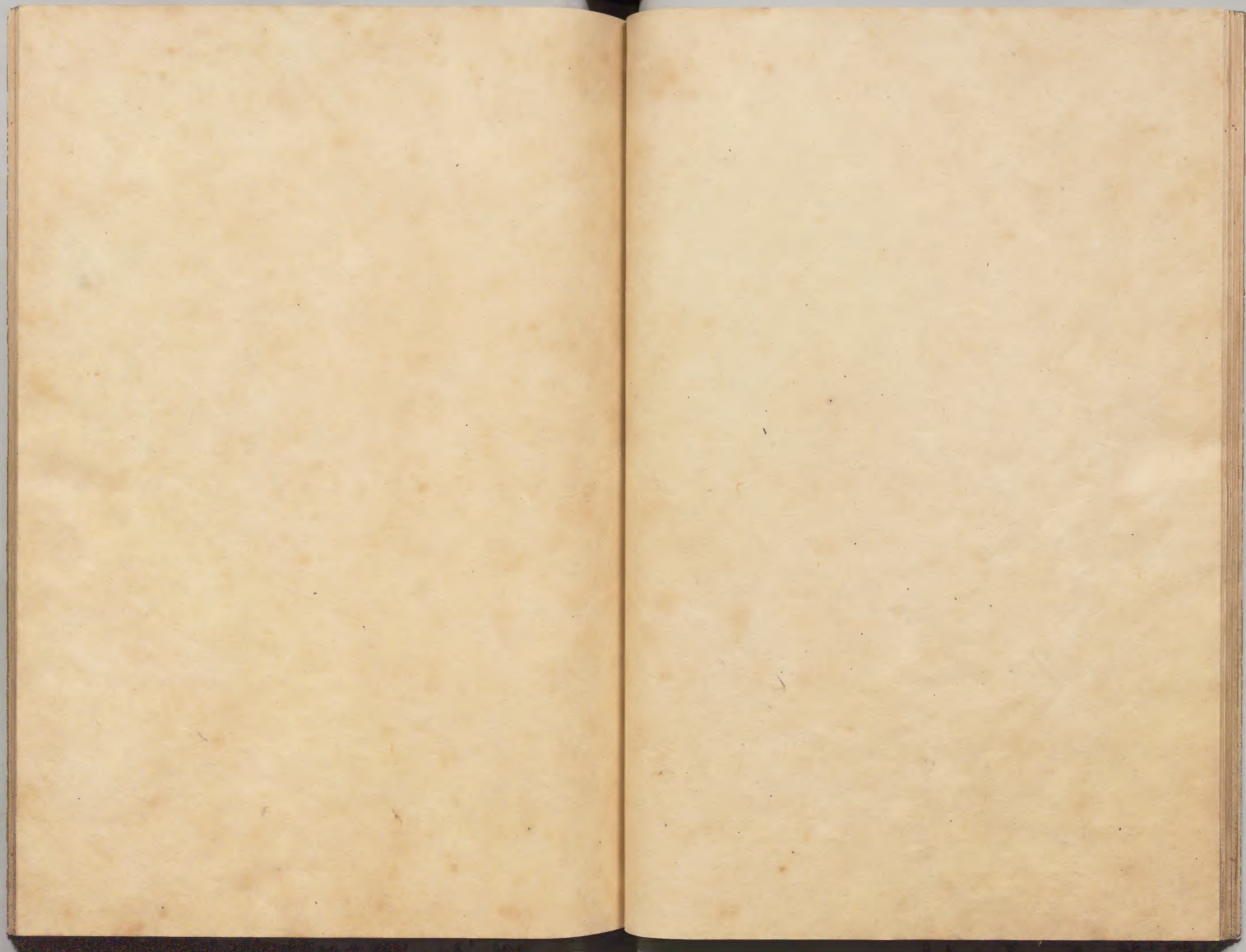
同十七年父忠次が遺領の四千七百石と

同十八年父忠次が領地の内二百石と

同十九年父忠次が領地の内二百石と

同二十年父忠次が領地の内二百石と

家紋丸内鳩殿尊



中川 なかつがは

● 勝重 かつしげ

雅樂助 生國甲列 みやがけ せいこくこうりつ

茂田信玄勝頼父子につま しげのぶのぶかつらふじにつま

天正十年

東照大権現甲列御入國の時りもふれ  
あたくしより御朱印と以載 あたくしよりみづいんとおそえ

勝定

承久三年 生國日記

台徳院殿へ此のてまつり御朱印と  
給り其後

將軍家へ此のてまつり

昌勝

承久三年

生國日記

實（昌勝の子なり）昌安（昌勝の子なり）昌安也

大権現

台徳院殿

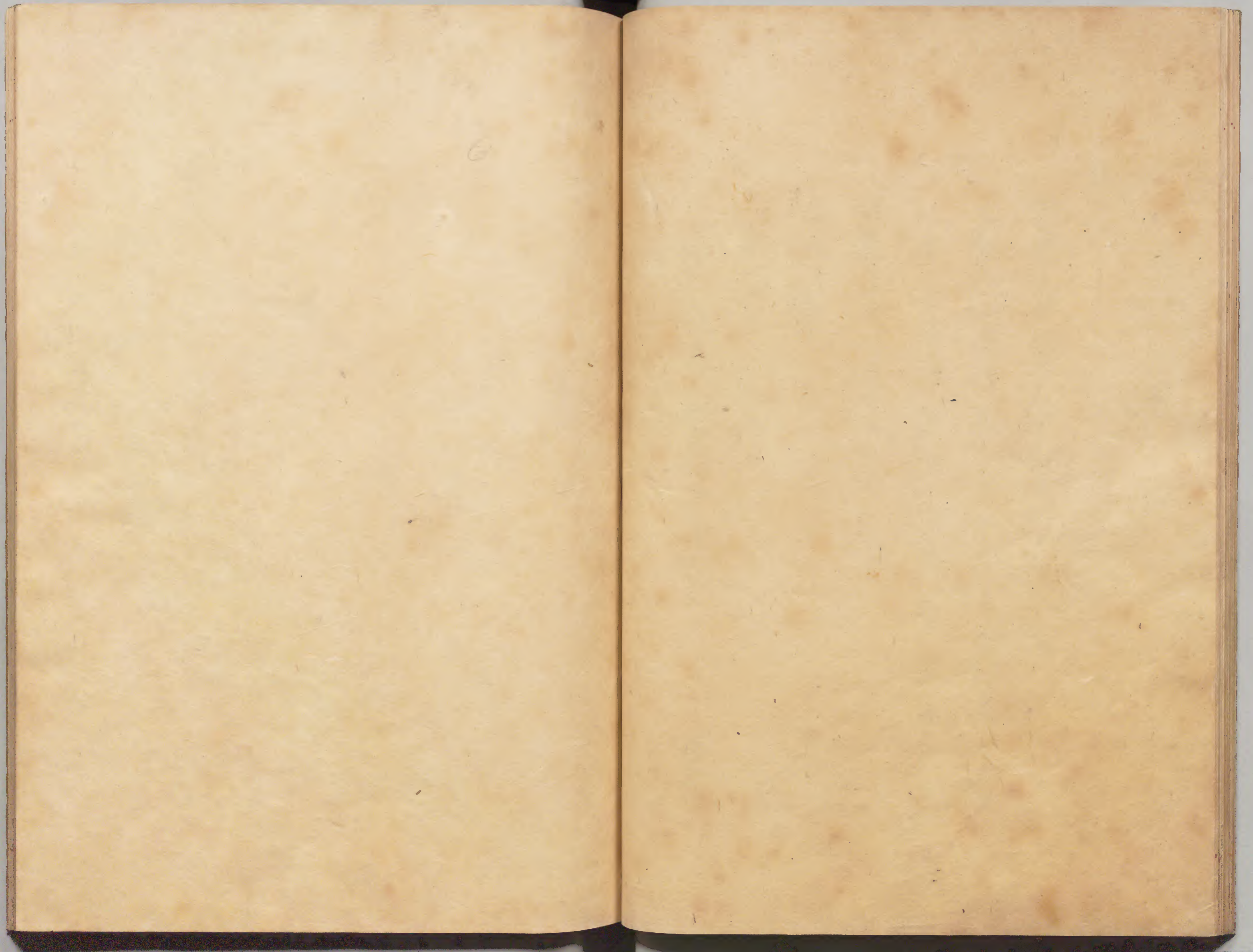
將軍家へ此のてまつり

寛永二年昌勝勝定の書中よりて

中川と稱号す

將軍家へ此のてまつり

家紋  
訂契



集

傳た勝の

生國之列

實まことの大おほい久ひさ保たもと

六む郎らうの

婿むこ男おとこ也なり

と郎らうの

妻つま子こ

● 集

熱あつここ郎らう

中ちゆう川かう

こけり

台徳院殿

將軍家（水奉公仕其後病死）

政次（まこと）

傳三郎

家紋者丸内大文字（このしんがりのうちにしん）



伊丹 いだけ

● 康直 やすちき

大隅守 おおくすみのり

生國撰列 なまにくまのり

五六蒙の附撰津國兵乱このたひやうらんより付くまへ後列ごれつ

一列いれつより先祖せんぞの後ごたりきより寸康直すんかうちき

後列ごれつ義元ぎげんちらちららももくく義元ぎげん氏高うぢたかに

ああららひひてて叔度すくどの軍功ぐんこうありあり一ひと事ことと

信玄しんげんのおとこふらりしひおつれ船大  
將しやうのつりの孫列遠列まご之列表しよおわく  
船中ふねのつねたりの働はたらかな度たりの情なさけ頼代たのとなるは  
右代みぎしろのつねたりの軍い忠ちゆうのおもじき  
東照大権現とうしやうとなりの達たつしりおつれつく  
たくしりふ

房康ふさやす

権大史 生國駿列

氏志うぢ信玄しんげん勝頼かつらう一つふ甲列けつ一い亂らんのら  
天正十八年

大権現甲列おほ入國いりのきさらりのおつれ  
其後

台徳院殿たいとくへいくしてしりふ

之信しん

理右衛門 生國相摸  
台徳院殿

將軍家へ此くへしそしるふ

康重 くわじゆう

赤又右衛門

大権現へ此くへ

某 なにか

赤又右衛門

大権現駿列河入國の列者社又康重

めいもこれ赤又右衛門も其時よりつゝ  
たぐしるふ

勝重 かちじゆう

たき勝

康勝 くわじゆう

播磨守 はりまのしゅ

初ハ赤又と号す はつハあかまたとごうす

大権現

台徳院殿（水名を名勅定を以て信つけら

出らんくわう（出らんくわう） 是日本國中（水苑入仕並末を承り

延文十九年（同廿年大坂名亂の初法軍

勢の扶持方（支配）

五月七日大坂（水合戦の時城きいし高名

つうちう（つうちう）

台徳院殿御前（水一りかす別）

大権現（水使）

大権現（水後）

おりめさうけう（水）  
ぬきん（つるき）  
え和十年二月

台徳院殿の命（水）

佐伴守（水）

將軍（水）

栗田（水）

御加勢（水）

しり回國の仕（水）

きんちん  
勅書さこのたのら康勝あき作渡國あきの仕書あきと受け  
たまふあき家  
判發あきして噴録あきと号あきす

直勝あき

金十郎 生國あき武列 年三十二あきふして  
病死あき

勝經あき

加藤 生國あき日記

將軍家あき一つふそそあきいふ

勝長あき

義人あき

天文十二年あき五葉あきあして  
白徳院あき殿と号あきたふそそあきり十二葉あきふり  
つふそそあきいふ

勝政 かつまさ

五た湯の

寛永十一年十二月十日

將軍家とありしそまら

勝重 かつしげ

理た湯の

寛永十一年十二月七日

將軍家とありしそまら

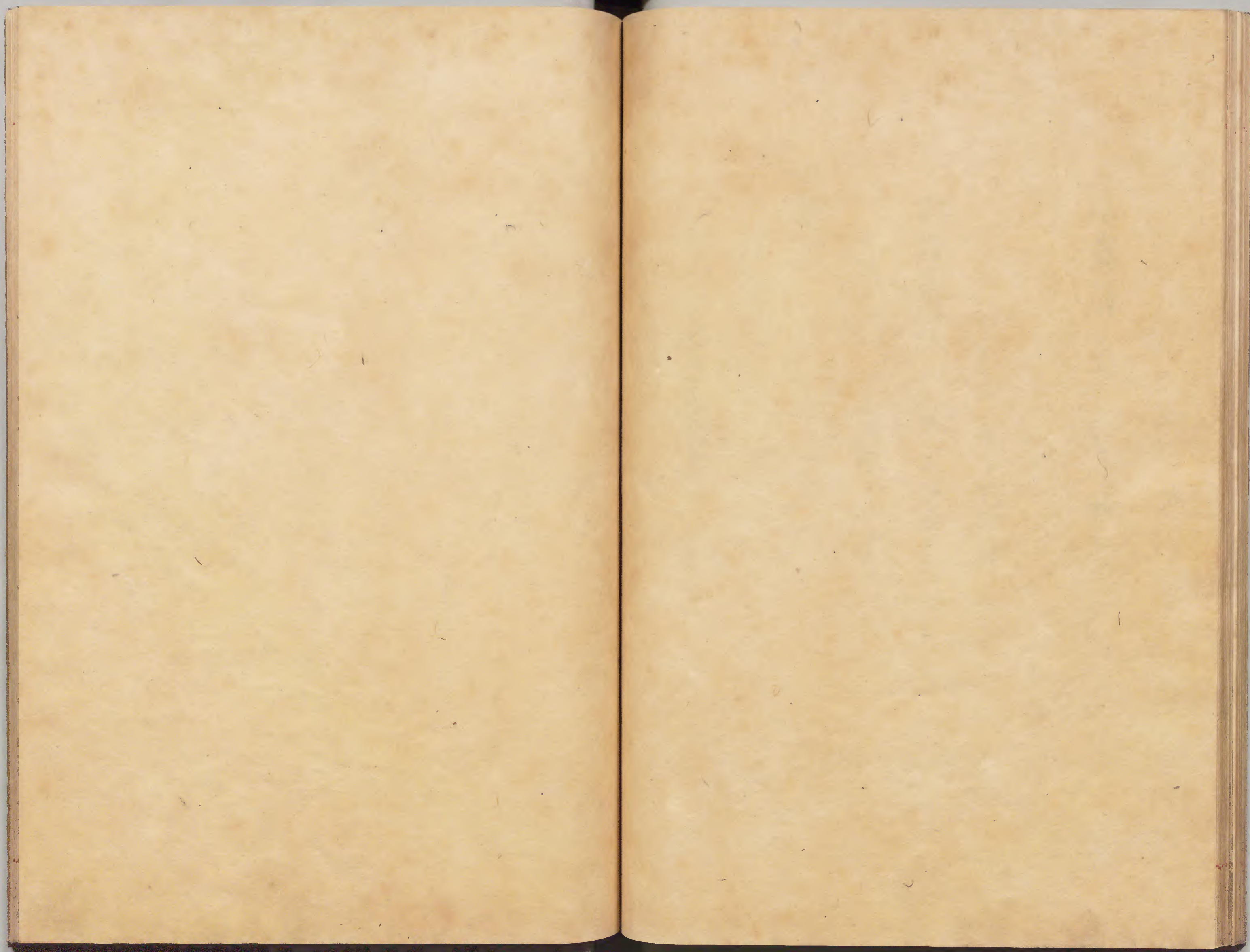
武勝 ぶかつ

内苑助 うちえんすけ

生園山城 なまきりやま

將軍家ふつとそまら

家紋上者丸に加字 このしん かりまのまる



伊丹 いだけ

● 宗次 むねつぐ

新左衛門 しんざゑもん

法名常圓 ほふなむねのくに

生國相列 なまくにあひだり

小條氏 こじょうし  
遊了 ゆりょう  
所子 ところこ

宗重 むねしげ

隼人 はやとりの  
正 ただ

生國 なまくに  
同前



小條安房守小左衛門正あんのま  
慶長五年病死ひやうし 法名常森しやうき

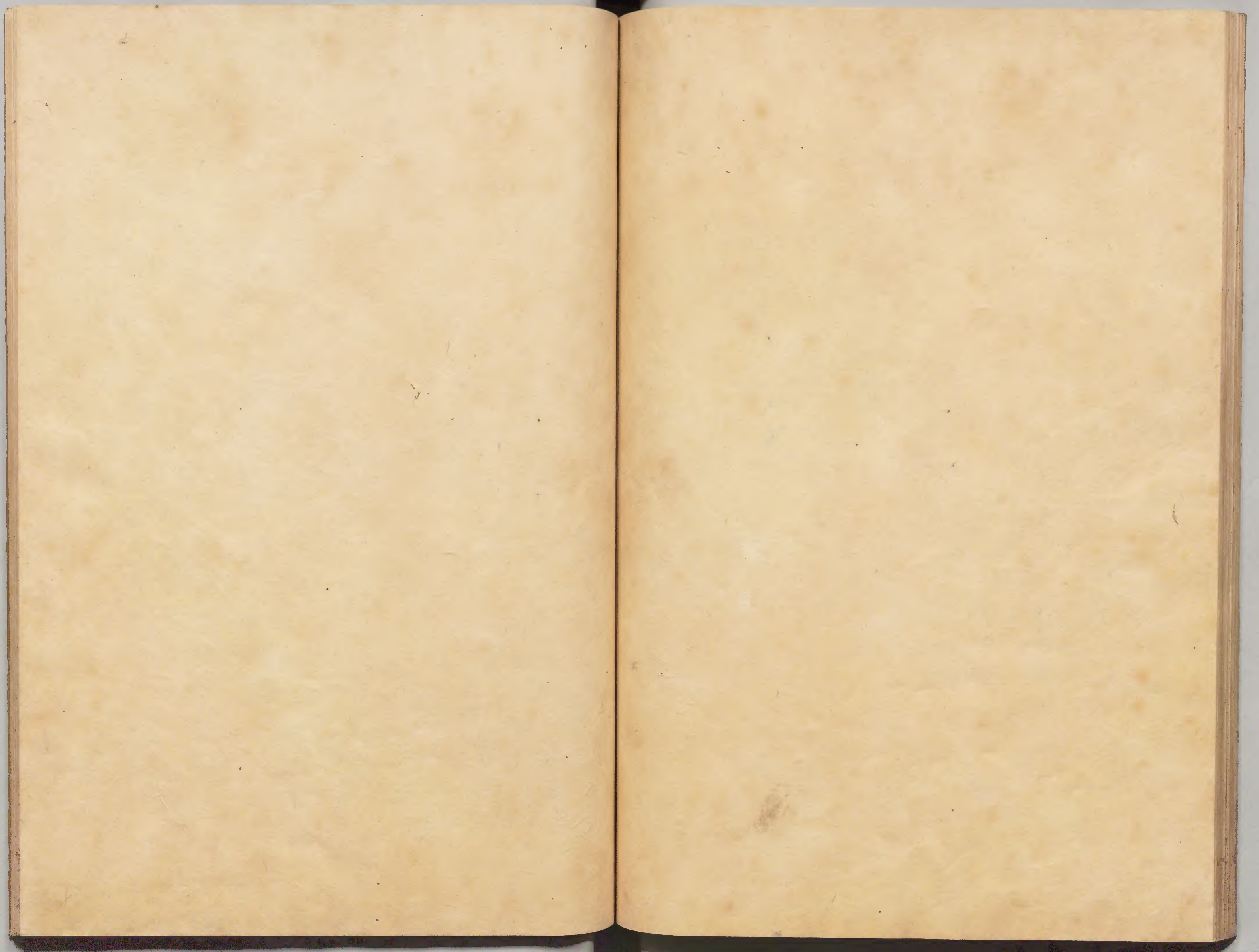
宗俊ひよし

十萬ふひ 生國上野

寛永十七年

大権現たいけんげんと御ごしたくまつり大坂あ後の御陣ごじん  
借手くふ  
迎年むかひとしより殿守とのりの御者ごしやと相持あひまとじ

家の紋下敷いのゝんこりふら  
家紋下敷



● 正親 まさちか

兵庫 ひょうご

慶長五年 関ヶ原陣より討死 せicho 5nen せきがはらじんより うちし

永親 ながちか

国後守 くにのちか

伊丹 いだん

白徳院殿よつろしそしりる

なりり  
永教

宗名勝 生國あし撰列大坂

白徳院殿よつろしり其後

將軍家よつろしそしりる

このしん  
家紋下巻丸門加字

昌澄

多田

三八郎 淡路 生國義濃

弓矢修例のたぬ甲列へて武田信虎

信玄父子つと久日公と形り志づく

軍功あり信列庶を苑山より在城

信玄より感状あり

今十九卯刻於位列塚魔郡一戰  
初頭を討捕し糸雖不始子細  
亦妙く至以時日ん被友中に頸殺  
多致しし事忠節し中名に能く

三帝舎山坊

天多十七戌年

七月十九日

晴信判

多田三八郎

永祿六年十二月病死 法名宗樊

某

新八郎 八右衛門 生國甲列  
信玄へつゝへて日んをあらはる  
元龜元年四十二歳し病死

正者

三八郎 八右衛門 生國同前

天正十年

大権現甲列<sup>うしろ</sup>水入國<sup>みづいりくに</sup>の時<sup>とき</sup>ありあさる

日十二年<sup>にちじふにねん</sup>長久手<sup>ながくで</sup>陣<sup>じん</sup>あり佐<sup>すけ</sup>あり

高名<sup>たかね</sup>あり

慶長十二年五月十八日<sup>けichoじふにねんごがつじふはちにち</sup>四十二<sup>しじふに</sup>歳<sup>さい</sup>に病<sup>びやう</sup>死<sup>し</sup>

正長<sup>ただなが</sup>

三八郎<sup>さんぱちらう</sup> 生國<sup>なまくに</sup>河前<sup>かまへ</sup>

大権現

白徳院殿

將軍<sup>しやうぐん</sup>家<sup>け</sup>一<sup>いつ</sup>つ<sup>つ</sup>へ<sup>へ</sup>そ<sup>そ</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>り

正次<sup>ただつぐ</sup>

八助<sup>やっすけ</sup> 生國<sup>なまくに</sup>武列<sup>ぶれつ</sup>

白徳院殿

將軍<sup>しやうぐん</sup>家<sup>け</sup>一<sup>いつ</sup>つ<sup>つ</sup>へ<sup>へ</sup>そ<sup>そ</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>り

寛永十四年四月<sup>かんえいじゆしよねんしがつ</sup>八<sup>はち</sup>日<sup>にち</sup>に死<sup>し</sup>す

正重

市右衛門

生國月前

將軍家へ此之しそそしる

正行

右衛門次郎

生國日前

將軍家へ此之しそそしる

寛永十五年十二月又正次り遺跡

たすか

昌俊

三八郎

生國茂濃

氏田信玄小此之又昌澄におろく軍

切所り志ふしそ信玄へ不足ありゆ

甲列とたら去り矢終りして関東小

あしむく

永禄十年十二月七日武列岩付

おろく討死を時り三十五歳 法名昌取



昌經

三八郎 生國甲列

父昌俊因東へおとじく時り昌經幼少の

ゆ伯舅おん右衛門尉養育せしゆ

天正十年小糸氏並甲列とおせあはき

大権現御進發たるは御先主一人救つら

たしつり時武川の者ともて同く忠

節とけく一糸の無ごとの海へ

小浜の小屋と逃落し時り

大権現新府おとへ一山座の時りあは

新府おとへ小おわく高きあり時り昌經

十六業

日十二年尾列小牧陣は佐平一國一

宮城とすゆふ

日十三年士卒と其回おとへけり

時軍功とけり書子と駿列身國さ

一そまつり忠義とけりすゆ武川

元と同く御書とたまはるは

日十八年小田原陣の時佐と

日年関東入國の時武列録飛

おのく領地とたまはるは

日十九年九部御陣とたまはるは

慶長五年國原水陣の時

大権現の命とたまはるは

台徳院殿に之をまつり高田陣の時

供奉と

大権現の命より義直の命より

来地の御加増とたまはるは

日十年正月廿日病死年二十九

昌繁

次郎右衛門 生國武列

父昌經死去昌繁幼雅なり

録飛武川の兵士と目くあり

是き旨成瀬隼人正成 釣命と昌繁

小治ふふり

白徳院殿一りおさし大坂五度の所陣アサコに  
伏奉すくふ

元和九年台命たいめいふり忠長たかちか一此之其後

將軍家とありたくせりり此杖持方ふらちとあり

寛永十六年下総大湊おほみなと小おのて領アサコ

地とたまりり御殿守ごんもの御者ごんとつこじ

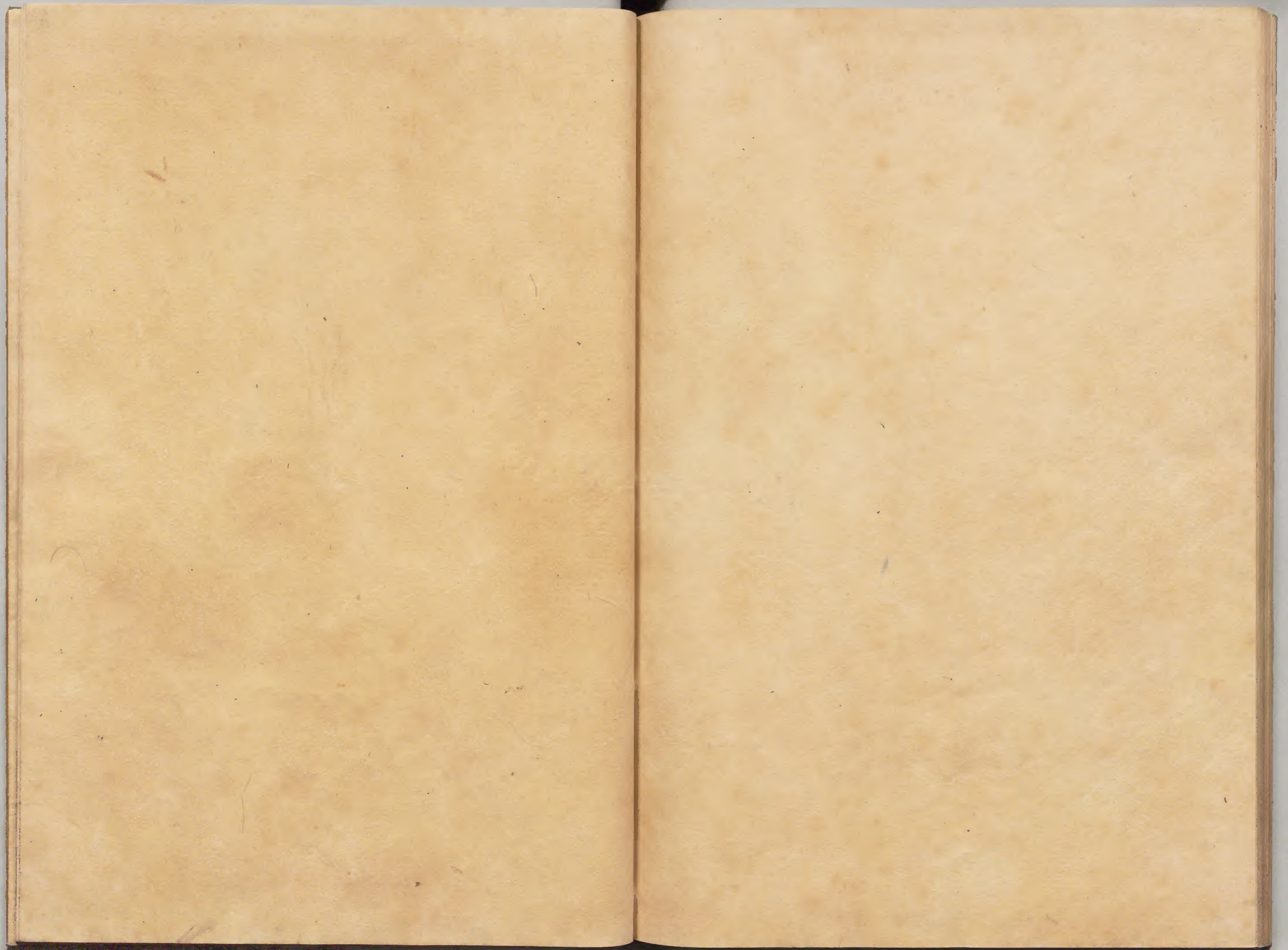
まじゆまのりんまのりらにりり

正行幕紋九内可字

まじゆま

まじゆまのりらにりり

昌繁幕紋一葉葵内六星



多田 ただ

● 某 たれし

慶忠 けいちゆう

生國攝列 しやうこくしやうりやく

大権現 おほいけんげん へつる奉 たてまつる

正政 せいせい

三吉 所存の

生國之列 しやうこくしやうりやく

大権現と降し奉るおほせふより初  
三者のらに西右勝のこゝなふり名と  
以付さるる年四十二歳より死

正信

西右勝

生國氏列

大権現

台徳院殿

將軍家とありしとあり

正与

三吉 生國日前

將軍家へ此久たたくし

家紋獅子小牡丹  
派紋まん字とあり

